

エコモノ

100%再生できるカトラリー



株式会社中野科学 (電話0256-62-2548) <http://www.sustain.jp/>

色あざやかなカラーステンレスのカトラリーが登場しました。塗料や染料を一切使わず、光の現象によって発色する不思議なカトラリーです。溶かしても有害物質が発生しないため、簡単に100%リサイクルできるというすぐれもの。製作した中野科学では、このほかにも鏡やタイルなど、同じ技術を用いた製品を開発していくひそかな人気。お気に入りの色のカトラリーを揃えて、長く愛用したいですね。



太陽光で動く飛行機

リビング・モティーフ (電話03-3587-2784) <http://www.livingmotif.com/>

エコモノたちで、
あなたの暮らしを
彩りあるものにしてみませんか。

充電できるリュック



K weather Japan株式会社 [Reware Japan] (電話050-3682-2666) <http://www.rewarestore.jp/>

なにやらメタリックなリュックサックの前面。じつはソーラーパネルがはめこまれているのです。ここで太陽光を受けて発電すると、携帯電話やデジタルカメラに充電できます。超軽量太陽電池のパネルはフレキシブルで、しかも丈夫。太陽光さえあれば、世界中で使えます。ビジネスにもアウトドアにも大活躍してくれそうですね。これからは、モバイル機器の充電は太陽の下で!が当たり前になるかもしれません。

江戸の商店街で、店の人々が夏の夜に涼んでいる様子を描いた「江戸市街店頭夏夜之納涼」という絵をお目にかける。この絵の説明を現代語で要約すると、

「町内両側の店は、日暮れどきに商売をやめて、店先から道路全体にたっぷり打ち水をする。湯あみをして夕食を済ませると、どの家も涼み台を出し夕バコ盆や团扇などを用意して浴衣がけの夫婦子供が出て涼んだ。(中略)また、大人同士は世間話をし、子供たちも一緒に遊ぶ。宵の口まで毎晩こうやつて涼ものが普通だつた」

といったところだろうか。ちょっと羨ましいようだが、江戸時代ほど古い時代でない私の子供の頃の東京の住宅地でも、同じように夕涼みをしていたものだ。しかし、今の舗装道路に少し

文 / 石川英輔

エッセイ 大江戸エコロ帖
◇第2回◇

冷やさずに冷やす

ぐらい水を撒いてもあまり涼しくならない。

昔の道路は土に砂利を入れて突き固めただけなので、地表のすぐ下はいつも湿っている。下の層から毛細管現象で水を吸い上げているからだ。

水はコンクリートよりはるかに温度が上がりにくいくらい、熱せられて水分が蒸発するときに周囲の熱を奪つて冷やす作用がある。その上へさらに打ち水をするのだから、温度を下げる効果が大きかった。

ところが、コンクリートの道路は、直射日光を受けると表面温度がすぐ55℃かそれ以上になるばかりか容易にさめず、打ち水をしても表面を濡らすだけなので温度が下がりにくい。しかも、現代の町の中は、道路だけでなく鉄筋コンクリートの建物が多く、真夏の直射日光を受けると町全体が焼けただれたようになるのはご存じの通りだ。

つまり、現在の都市が打ち水ぐらいで気温が下がりにくく構造になつていて、木造家屋が主だった昔の日本の町は真夏になるのはご存じの通りだ。

つまり、現在の都市が打ち水ぐらいで気温が下がりにくく構造になつていて、木造家屋が主だった昔の日本の町は真夏でも温度が上がりにくく、日没後の路面にたっぷり打ち水をすれば、実際に真夏でもかなり涼くなつたのである。現代の真夏の都市は、冷房しないと耐えられないのに、冷房機で室内を冷やすと室外の温度が上がるばかりか、冷房機自体が熱源になるため、冷房をするほど気温が上がるという悪循環に陥っているのだ。

暑ければエネルギーを使って冷やそうとする現代文明は、自然界から強烈な反撃を受けたじろいでいる。冷やさずに冷やしていた文化をもう一度見直せないものだろうか。

いしかわえいすけ
作家。著書に、「江戸時代の資源やエネルギーの循環について紹介した

「大江戸リサイクル事情」「大江戸えねるぎ事情」などがある。

